# 明石の史跡（４０）区長の必需品

ここに大正１４年（１９２５）１０月１４日付の、魚住村役場より中尾区長（山崎政助）宛の通達がある（山崎眞一家文書）。１０月１日の第二回国勢調査も無事に終了。好天に恵まれるであろう１０月の２０日に、優良村の視察が計画された。定数は、当村（魚住村）より２～３名（ということは区長が対象と考えても差支えはない）。ただし希望者が定数を上回れば、抽選となる。視察地は美嚢郡淡河村南僧尾（神戸市北区）。

当日は、午前８時半に神出村役場（直線１０キロ余）に集合。９時に出発し、目的地（直線１６キロ余）に向かう。交通手段は、往復ともに自転車であった。なお参加者には、一人当たり１円５０銭の弁当料が支給されている。

明石に自転車なるものを導入したのは、中町の呉服店の主人が、神戸で購入したグリンランド号（３２０円）が最初とされ、明治２９年（１８９６）のことであった。わが国に自転車なるものが上陸してから、１５年を経過していた。練習しながら帰路についた呉服店の主人は、明石にたどり着いたときには、それなりに乗りこなしていたのだろう。

明治３４年（１９０１）頃には自転車店が出現。それでも庶民には手が届きにくいものであったろう。明治４０年（１９０７）１０月から、明石相生町で布教していた、アメリカ人のクーパー牧師は、巡回には自転車を使用していたという証言も残されている（明石市史下．９３頁）。それでも自転車は、珍しいもので、また庶民には、簡単には手が届きにくいものであったろう。

上記の区長たちが、自転車を連ねてさっそうと、視察に赴く姿は、もはや貴重品ではなく、行政担当者の必需品であったことを示すものであろう。今日、著名な自動車メーカー（ポルシェ）の製作した自転車は２８万円と聞き及ぶ。彼ら区長たちの乗った自転車は、どの程度のレベルのもであったかは、少々気がかりでもある。

**日本歴史学会会員 茨木 一成**